菩提心

玉置韜晃

一

若し菩提心にして戯論の對象となるならば、それは既に菩提心としての眞面目を失つたものであり、その尊き使命を冒瀆したものである。道元禪師の『學道用心集』の菩提心を發すべき事の條下に、

有が云はく、菩提心とは無上正等覺心なり、名聞利養にかゝはるべからず。有が云はく、一念三千の觀解なり。有が云はく、一念不生の法門なり。有が云はく、入佛界の心なりと。是の如きの輩は未だ菩提心を知らず、猥に菩提心を謗す、佛道の中に於て遠うして遠し、誠に吾我名利の當心を顧よ、一念三千の性相を融ずるや否や、一念不生の法門を證するや否や、唯だ貪名愛利の妄念のみ有つて更に菩提心の取るべき無きや、

と隨分手きびしき敎誡であるが、菩提心をもつて戯論の對象としてとやかく辯疏することの不心得を懇切に誡められたものである。

然るに、この嚴肅な教誡に接して、強ひて菩提心を辯疏することの愚を重ねることに深い反省を持ちながらなほかつ、この一文を草することに理由がある。それは古聖賢の菩提心に對する尊い考察の一般を窺ふうちに、菩提心に對する尊敬と、深い信頼とをもちつゞけることができるだらうとの念願からである。また、雜多な經論釋を擧げて、煩はしく菩提心の意義を詮索したことは、そこに、聖道諸家と大に趣を異にする淨土一家の大菩提心を再考しようとした要期からでもある。

『華嚴經』普賢行願品第三十五には、菩提心の功德を讃へて、

善男子、菩提心者猶如種子、能生一切諸佛法故、菩提心者猶如大地、能持一切諸世間故、菩提心者猶如大水、能滌一切煩惱垢、乃至菩提心者如大虛空、諸妙功德廣無邊故、菩提心者如妙蓮華、不染一切世間法故。

と說いて、一切佛法は正に菩提心より生るゝことを教へてゐる。次下の經文には、

善男子、菩提心者成就如是無量無邊最勝功德、擧要言之、應知悉與一切佛法諸功德等、何以故、因菩提心、出生一切菩薩行輪、三世十方一切如來、從菩提心而出生故、是故善男子、若有能發阿耨多羅三藐三菩提心者、則已出生無量功德、普能攝能攝取一切智道。

とて、更に具體的に菩提心から一切菩薩の行輪も出生し、三世十方一切如來もまた出生すべしと嘆ぜられた。更に、『同經』普賢行願品第三十六に於ては、

善男子、譬如一燈然百千燈、其本一燈無滅無盡、菩薩摩訶薩菩提心燈、亦復如是、普然三世諸佛智燈、而其心燈無滅無盡、善男子、譬如一灯入於闇室、百千年闇悉能破盡、發起光明、普照一切、菩薩摩訶薩菩提心燈、亦復如是、入衆生心無明闇室、能滅無量百千萬億不可說劫積聚、一切諸業煩惱種々障礙、發生一切大智光明。

とて菩提心燈よく千古の無明の暗を照破し、一切煩惱障礙を滅して、大智光明を發生すと說き、また、『同經』普賢行願品三十六に菩提心の威力を說いて、

如師子王哮吼之時、師子兒聞皆增勇健餘獸聞之、脂血銷耗、卽皆竄伏、佛師子王菩提哮吼、一切智聲應知亦爾、諸菩薩聞、養育法身、增長功德、其餘一切邪執衆生、聞皆退散如冰銷釋等。

と、更に次下に菩提心は五怖畏を離れしめることを敎へて、

譬如有人得無畏藥離五恐怖、何等爲五、所謂水火不能燒、毒不能中、刀不能傷、水不能漂、煙不能熏乃至得一切智菩提心藥、離五怖畏、何等爲五、不爲一切三毒火燒、五欲毒不中、惑刀不傷、有流不漂、諸覺觀煙不能熏害。

と、これらの華嚴經の諸文によつて一般的に菩提心の功德と威力とを概觀することができたやうである。また、『轉女身經』には、菩提心はよく女身を轉ずることを示して、

若女人成就一法、得離女身速成男子、何謂爲一、所謂深心求於菩提、若有女人發菩提心、則是大

善人心、乃至、若諸女人發菩提心、則更不雜女人諸結縛心、以不雜故、永離女身得成男子、所有善根、亦當廻向無上菩提。

と說き、また、『首楞嚴三昧經』卷上には、

發大乘者、不見男女而有別異、所以者何、薩婆若心、不在三界、有分別故、有男有女。

とて發大乘心のものには男女の區別なしと示されてゐる。これらもまた菩提心の功德を讃へたものであらう。ところが、『華手經』發心品第十一には、

阿逸多、當知諸佛一切功德、皆在初發調伏心中、是故菩薩、世間難遇佛亦難値、阿逸多、譬如無牛則無醍醐、如是若無菩薩發心、則無佛種、若有牛則有醍醐、如是若有菩薩心、則佛種不斷、阿逸多、譬如有種則有華實、如是若有菩薩發心則佛種不斷、是故當知發心爲難、發心難故、佛亦難得。

と、また『同經』無憂品第十二によれば、

佛燈出於世、萬億劫難値、如優曇鉢華、時々乃一現、深發菩提心、正行佛道者、如是大菩薩、世間亦難遇、是故若有人、能發此大心、斯人當作佛、處衆師子吼、自在師子吼、能轉淨法輪、佛神通無礙、皆在初心中。

と說き、發菩提心の至難な點と、而も、初發心中に自ら佛の轉法輪も神通無礙も圓具すべきことを

示してゐる。

以上華嚴經と並に華手經とによつて菩提心相を概觀したのであるが、この二經を借りて來たことは他意あるものではなく、菩提心相についての佛教學の一般的な立場がよくこの二經によつて代表されてゐるからである。

二

菩提心の體相については、それは非常に廣範圍にわたつた聖道心だと考へてよい。先づ阿含經典に現はれた三十七道品などすべて菩提心と考へてよいだらう。就中四弘誓願とか、七覺支などはその核心をなすものだらう。四弘誓願とは、四種の廣弘誓願の意味であつて、菩提心の素材となるものである。だが阿含經典とか古い大乘經典などでは四弘誓願といふ熟語は見當らない、やゝ後代のものと思はれる、『不退轉法輪經』第二・『觀彌勒菩薩上生兜率天經』・『薩婆多毘尼毘婆沙』第四などに始めてその名目が出てゐるやうである。而して、世親の『佛性論』第四に來つて四弘誓願の名義と組織とが完成したやうである。『長阿含經』第八第二分散陀那經第四に、

瞿曇沙門能說菩提、自能調伏、能調伏人、自得止息、能止息人、自度彼岸、能使人度、自得解脫、能解脫人、自得滅度、能滅度人。

と說いてゐるが、四弘誓願の原型として見てよからう。更に、『法華經』第三藥草喩品には、

未度者令度、未解者令解、未安者令安、未涅槃者令得涅槃。

と說いてゐるのも四弘誓願の素材であり、『道行般若』第八頁高品にも法華經の同類の素材を見出すことができる。これらの大乘經典より少しく後世の編纂にかゝつたものゝ中で、『大方等大集經』第十七虛空藏菩薩品などによれば、諸菩薩の二十誓莊嚴などに、かなりまとまつた四弘誓願がとかれてゐるやうである。

四弘誓願の意義をこゝで更めて論ずるまでもないが、智顗の著『法界次第初門』卷下之上の釋意をかることが便利であるから、左に抄出して置く。

一、未度者令度

此弘誓緣苦諦而起、故瓔珞經云未度苦諦令度苦諦、今明苦者卽是生死也、生死有二種、一分段生死、謂六道衆生所禀陰入界身果報、既麤有形質分段之成壞也、二變易生死、謂羅漢辟支及大力菩薩三種意生身、雖無分段麤報猶有細微因轉果移變易生滅之所遷也、一切未度二種生死苦者、菩薩發心願令得度故、云未度者令度。

二、未解者令解

此誓緣集諦而起故、瓔珞經云、未解集諦令解集諦、今明集者卽是煩惱潤業能招聚生死、煩惱潤業

有二種、一四住地煩惱潤分段生死業能招聚分段生死苦果也、二無明住地煩惱潤變易生死業能招聚變易生死苦果也、若一切未解此二種集者菩薩發心願令得解故云未解者令解。

三、未安者令安

此弘誓緣道諦而起故、瓔珞經云未安道諦令安道諦今明道諦者卽是能通涅槃之正助道也、有二種正助道一偏緣眞諦修正助道是道但得至小乘盡苦涅槃、二正緣中道實相修正助道是道能到大乘大般涅槃、若一切未安此二種道者菩薩發心願令得安故云未安者令安也。

四、未涅槃者令得涅槃

此弘誓緣滅諦而起故、瓔珞經云未得滅諦令得滅諦今明滅諦者卽是業煩惱及生死苦果滅也、有二種業煩惱生死、一分段生死業四住地煩惱滅則分段生死苦果滅卽二乘所得滅諦也、二變易生死業無明住地煩惱滅則變易生死苦果滅諸佛及大菩薩所得不共究竟滅諦也、若一切未得此二種滅諦者菩薩發心願令得滅故云未得涅槃者令得涅槃、今四種弘誓所緣四諦與前聲聞中明四諦有半滿異、前但明半字有作四聖諦今明滿字無作四聖諦、所以二種四聖諦合明者、菩薩之道教門不同、若是三藏教通教所明弘誓但緣有作四聖諦而起、若是別教圓教所明弘誓通緣有作無作二種四聖諦而起故、約弘誓分別四諦半滿異於前也。

これ全く『法華經』藥草品の文を祖述したものであるが、きはめて要領よくまとめられてゐる。而

も、大小の四弘誓願の意義を詳述しながら發菩提心の全貌をよくあらはしてゐる。次に、七覺支によつて三十七道品を代表せしめてその概貌を瞥見しよう。七覺支とは菩提に順趣する七種の法といふ意味である。そこで、七菩提分或は七覺分ともいはれてゐる。『長阿含經』第八衆集經には、

復有七法、謂七覺意、念覺意、法覺意、精進覺意、喜覺意、猗覺意、定覺意、護覺意、是爲如來所說正法。

とあつて、更に『同經』第九、十上經、第十二、淸淨經、第二十二、世本緣品等にも同類の說明がある。『雜阿含經』第二十六には、

若修習七覺支、多修習令增廣、是則不退法、何等爲七、謂念覺支、擇法覺支、精神覺支、猗覺支、喜覺支、定覺支、捨覺支、是名不退法、

無畏白佛羅曇、何因何緣衆生淸淨、佛告無畏、若婆羅門有一勝念、決定成就、久時所作、久時所說、能隨憶念當於爾時習念覺支、修念覺支已、念覺滿足乃至修捨覺支已、捨覺支滿足、如是無畏、此因此緣、衆生淸淨。

と說いてゐるが、七覺支もまた發菩提心の素材としてはかなりとゝのつたものである。今またこの七覺支について智顗の『法界次第初門』中之下の釋をかりて見よう。

一、擇法覺分

智慧觀諸法時、善能簡別眞僞、不謬取諸虛僞法故、名擇法覺分。

二、精進覺分

精進修諸道法時、善能覺了不謬行於無益之苦行常勤、心在眞法中行故、名精進覺分。

三、喜　覺　分

若心得法喜善能覺了此喜、不依顚倒之法而生歡喜住眞法喜故、名喜覺分。

四、除　覺　分

若斷除諸見煩惱之時、善能覺了除諸虛僞不損眞正善根故名除覺分。

五、捨　覺　分

若捨所見念著之境時、善能覺了所捨之境虛僞不實永不追憶、是爲捨覺分。

六、定　覺　分

若發諸禪定之時、善能覺了諸禪虛假不生見愛妄想、是爲定覺分。

七、念　覺　分

若修出世道時、善能覺了常使定慧均平、若心沉沒當念用擇法精進喜等三覺分察起、若心浮動當念用除捨定等三覺分攝故、念覺常在二楹之間調和中適是名念覺分、此七通名覺分者無學實覺七事能到故、通名覺分也。

この智顗の詳釋によつて七覺支の概貌を覗ふことができると思ふ。以上四弘誓願と七覺支とによつて菩提心の素材を求めたのであるが、次に正しく菩提心について諸論釋を參照しよう。

三

『智度論』第四十一を見ると、

問曰、菩提心、無等等心、大心有何差別、答曰菩薩初發心緣無上道、我當作佛是名菩提心、無等等名爲佛、所以者何、一切衆生一切法、無與等者、是菩提心與佛相似、所以者何、因似果故、是名無等等心、是心無事不行、不求恩慧深固決定。乃至初發心名菩提心、行六波羅蜜名無等等心、入方便心中是名大心、如是等各有差別。

とあるが、菩提心の風格が明確に出てゐるやうである。また、龍樹の著と傳へられてはゐるが、恐らく僞作であらうと思はれるものに不空譯の『菩提心論』がある。――ところがこの問題の本書は弘法によつて「密藏肝心」の論として重用せられ、本論と『釋摩訶衍論』との二部十一卷を眞言所學の阿毘達磨藏と定めて以來、東密學徒によつて盛にもてはやされたものである。――

本論の內容は佛道を求むるものゝために、一心の本性、萬行の根源、得果の妙因たる菩提心の行相を宣示するをもつてその宗要としたやうである。而してその菩提心の行相を行願、勝義、三摩地

の三種に開説してゐる。

行願心とは、行を修し、願を發すから行願と名けるのであつて、その願とは一切衆生をして無上菩提に安住せしめんとの念願であり、その行とはこの目的を達成するための四弘誓願行を修することである。

勝義心とは、劣法を止息し勝義法を觀行することであつて、分別簡擇、捨劣得勝の自證心である。

三摩地とは、寂定の境地より、心鏡に映ずる諸法の實相を如實に諦觀することである。

已上の三種菩提心を論じて、菩提心の風貌を定義するまでに進んで來た。この本書の內容については東密一家の指南によれば、前の二は顯教にも通じ、第三はたゝ密教獨自の所談であつて、また三心を序の如く大悲、大智、大定の三德並に化他、自證、不二の二行に配釋することができるやうである。本書が重用された東密系からは有名な註釋が盛んに出てゐる。卽ち『發菩提心論秘釋』一卷(覺鑁)・『眞言淨菩提心私記』一卷(覺鑁)・『金剛頂宗菩提心論口決』一卷(榮西)・『菩提心論談義記』二卷(道範)・『菩提心論勘文』四卷(承澄)・『菩提心論初心鈔』二卷(賴瑜)・『菩提心論聞書』七卷(杲寶)・『發菩提心論鈔』十卷(宥快)・等である。いづれも東密一流の菩提心を手ぎわよく說述されてゐる。また、龍樹の『菩提心離相論』—施護譯—には、歸命一切佛、我今略說菩提心義、至誠

頂禮彼菩提心、とて次で菩提心の覺了によつて諸法空相に安住することの離相論に及び、是故若常覺了菩提心者、卽能安住諸法空相、又復常所覺了彼菩提心、以悲心觀大悲爲體、と論じ、自心本來不生、自性空故に立脚して所謂菩提心は一切の性を遠く離るべきことを高唱してゐる。卷尾に於ては、

我所稱讃菩提心、如二足尊正所說、而菩提心最尊勝、所獲福聚亦無量、我以此福施衆生、普願速超三有界、如理如實所稱揚、智者應當如是學。

と結歎して、離相菩提心の最勝最尊であることを述べてゐる。また龍樹の著として傳へられる天息災譯の『菩提行經』にも菩提心を波羅蜜と交渉づけて詳論してゐる。

更に、著者未詳宋法天譯『菩提心觀釋』には、龍樹の『菩提離相論』によつて、菩提心離相を論じ、また蓮華戒菩薩の撰と傳へられ宋施護譯の『廣釋菩提心論』に於ては、大小乘の經典を多く引用して廣く菩提心を詳述してゐる。次に世親の『發菩心經論』發心品第二には、無上菩提を發心修集するについて四緣をあげて、

一者思惟諸佛發菩提心、二者觀心過患發菩提心、三者慈愍衆生發菩提心、四者求最勝果發菩提心

と說き、更に思惟諸佛發菩提心を五事に分別して、

一者思惟十方過去未來現在諸佛初始發心具煩惱性亦如今我、終成正覺爲無上尊、以此緣故發菩提

心、二者思惟一切三世諸佛發大勇猛、各各能得無上菩提、若此菩提是可得法我亦應得、緣此事故發菩提心、三者思惟一切三世諸佛發大明慧、於無明中建立勝心積重苦行、皆能自拔超出三界、我亦如是當自拔濟、緣此事故發菩提心、四者思惟一切三世諸佛爲人中雄、皆度生死煩惱大海、我亦丈夫亦當能度、緣此事故發菩提心、五者思惟一切三世諸佛發大精進、捨身命財求一切智、我今亦當隨學諸佛、緣此事故發菩提心。

と說いてゐる。更に觀身過患發菩提心に五事を分別して、

一者自觀我身、五陰四大俱能興造無量惡業、欲捨離故、二者自觀我身、九孔常流臭穢不淨、生厭離故、三者自觀我身、有貪瞋癡無量煩惱燒然善心、欲除滅故、四者自觀我身、如泡如沫念念生滅、是可捨法欲棄捐故、五者自觀我身、無明所覆常造惡業、輪廻六道無利益故、

と述べ、また求最勝果發菩提心について五事を分別して、

一者見諸如來、相好莊嚴光明淸徹遇者除惱、爲修集故、二者見諸如來、法身常住淸淨無染、爲修集故、三者見諸如來、有戒定慧解脫知見淸淨法聚、爲修集故、四者見諸如來、有十力四無所畏大悲三念處爲修集故、五者見諸如來、有一切智、憐愍衆生慈悲普覆、能爲一切愚迷正道、爲修集故。

と說き、更にまた、憐愍衆生發菩提心につき五事に分別して、

一者見諸衆生爲無明所縛、二者見諸衆生爲衆苦所纏、三者見諸衆生集不善業、四者見諸衆生造極重惡、五者見諸衆生不修正法。

と、こゝまでくると、菩提心論の組織も既に完成されたやうである。

慧遠の『大乘義章』十六末三十七道品義三門分別の條下に菩提分の釋名、行門、行體、止觀分別、八正分別、大小不同等の項目にわかつて縷々解說してゐる。同第九卷發菩提心義三門分別の條下に於て正しく菩提心を詳論して、釋名辨體、因起次第、就位分別の三門に分別してゐる。

於大菩提起意趣求名發菩提心、然此發心經亦名願、要大菩提令求屬己故名爲願。體相云何、隨義不同略有三種、一者相發、二息相發、三者眞發、言相發者、行者深見生死之過涅槃福利、棄捨生死趣向涅槃、隨相厭求名相發心、言息相者、行者深悟諸法平等、知其生死本性寂滅涅槃亦如、生死寂故、無相可厭涅槃如故、無相可求返背前相歸心正道故名爲發（中略）言眞發者、菩提眞性由來已體妄想覆心、在而不覺謂之在外向外推求後息妄想、契窮自實、知菩提性由來已體無異趣求、知菩提性是已體故菩提卽心。

と、更にこの三種の菩提心について、因起の次第を述べ、位次分別を論じてゐる。

智顗の『摩訶止觀』一之上に五略十廣の條下に發心について菩提心を詳說してゐる。

菩提者天竺音也、此方稱道、質多者天竺音、此方言心、卽慮知之心也、天竺又稱汗栗馱、此方稱

是草木之心也、又稱矣栗馱、此方是積聚精要者爲心也。

とて、更に五略を解説して、

云何發大心、衆生昏倒不自覺知、勸令醒悟上求下化、云何修大行、雖復發心望路不動永無達期、勤牢强精進行四種三昧、云何感大果、雖不求梵天自應、稱揚妙報慰悅其心等。

と、發心、修行、感果の要領を明示した。

慧沼の撰として有名な『勸發菩提心集』には、明發心因緣門に於て、瑜伽發心品を引き諸の菩薩が正く願心を起こして心に菩提を求むる時に、

願我決定當證無上正等菩提、能作有情一切義利、畢竟安處究竟涅槃及以如來廣大智中等。

と、發心の自性と行相と所緣と功德と最勝とを詳に說いてゐる。次で菩薩の發心について四種の緣と四因四力とを述べ菩提心の相狀を詳述してゐる、蓋し慧沼は慈恩の五姓各別論に論據して就中、菩提種姓について論じたものである。

賢首の『華嚴發菩提心章』發心第一には、

起信論の三種心卽ち直心、深心、大悲心をあげ、更にこの三心を廣開して各心に十門を立てゝ詳說した。直心の十心とは、廣大心、深心、方便心、堅固心、無間心、折伏心、善巧心、不二心、無礙心、圓明心である。深心の十心とは、廣大心、修行心、究竟心、忍苦心、無厭足心、無疲倦心、

常心、不求果報心、歡喜心、不顚倒心である。大悲心の十心とは、廣大心、最勝心、巧方便心、忍苦心、無厭足心、無疲倦心、不求恩報心、歡喜心、不顚倒心である。この詳釋によつて、正く眞如法を念じ、一切諸善行を修することを樂ひ、一切苦の衆生を救度せんとする發心成就の相成を示したものである。

元曉の『遊心安樂道』には、菩提心について隨事發心と順理發心とに分別して、その隨事發心とは、煩惱の無數を斷ぜんとし、善法の無量を修し、衆生の無邊を度し、この三事の決定を期願するのであるが、初は如來の斷德正因であり、次は如來の智德正因であり、後は如來の恩德正因である。であるから如上の三心は無上菩提の因である。順理發心とは、諸法はみな幻夢の如く非有非無、離言絶慮と信解し、この信解によつて廣大心を發するのであると論じてゐる。

光胤の『中道空觀』一帖に附屬として三種菩提心を說いてゐる。左にその本文を抄出する。

夫菩提心者是三妙觀也、三妙觀、一厭離有爲心、二欣求菩提心、三深念衆生心。

第一厭離有爲心者、三界有漏之果、五蘊無常之身、且於欲界裏三十六物不淨而以爲身、聚百八十八之惑障、而爲心、色無色界行苦之報總厭三界果報、是名厭離有爲心。

第二欣求菩提心者、欣無上妙果、求菩提勝德、佛有五法、一實眞如、四智心品是也、分爲三身、一實眞如法身如來、四智心品報身實佛也、智品所變應大小機、是他受用變化身也等。

第三深念衆生心者、憐愍利益一切衆生之心也、夫求菩提還爲衆生、利有情亦爲菩提、故厭欣心與深念之心、名菩提心也。

已上、菩提心についての經論釋の指示を擧げて、ほゞその意義をたしかめ得たのであるが、更らに、淨土門に於ける菩提心論を見たいと思ふ。

四

法然の著『選擇集』第十二附屬佛名篇には、

菩提心者、諸師意不同也、天台卽有四敎菩提心、謂藏通別圓也、具如止觀說、眞言卽有三種菩提心、謂行願勝義三摩地是也、具如菩提心論說、華嚴亦有菩提心、如彼菩提心義及遊心安樂道等說、三論法相各有菩提心、具彼宗章疏等說、又有善導所釋菩提心、具如疏述、發菩提心其言雖一、名隨其宗、其義不同、然則菩提心之一句廣亙諸經、遍該題密、意氣博遠詮測懇、願諸行者莫執一遮萬諸求往生之人、各須發自宗之菩提心、縱雖無餘行、以菩提心爲往生業也。

更に次下の文によれば、

又有菩提心行、人皆以爲菩提心是淨土綱要、若無菩提心者卽不可往生、（中略）以此等行、殆抑念佛、倩尋經意者、不以此諸行付屬流通、唯以念佛一行、卽使付屬流通後世、應知釋尊所以不付屬

諸行者、卽非彌陀本願之故也、亦所以付屬念佛者、卽是彌陀本願之故也。

とある。これは正しく淨土門の菩提心論を代表した意見と見てよい。蓋しこの法然の菩提心論は當時の敎學界にとつては見逃すべからざる大問題であつた。ために、法然の沒後いくばくならずして明惠高辨の『摧邪輪』の公表となつた。

高辨の摧邪輪一部の公刊は、源空一門はいふまでもなく、當時の敎學界と通じて、異狀なセンセーションをまき起したやうである。甲論乙駁、贊否とりどりの論難ははからず沈滯しきつた當時の敎學界をにぎはしたやうである。了慧は『新扶選擇報恩集』二卷、『扶選擇正輪通義』一卷とを撰してこれを公にし、忠實に源空の所論に贊し、次で、良定は『評摧邪輪』一卷を著したが、その前序の一節に、

作者栂尾高辨明慧聖人也、於吾選擇集出諸難、一一引文釋義往々敦呵言吐燄所破既成立矣、今初見心驚毛竪、雖然破抑一分不當等、

これから見ても、『摧邪輪』の公表は淨土一家にとつては手嚴しい難題でもあり、また淨土一門の主張に對しても相當の反省を要求したものであつたらしい。次で、天台系の眞迢は『念佛選摧評』一卷を公にし、きはめて穩健に兩者の意見を理解し尊重して、よくこれを生かしながら法然に贊したものゝやうである。更に日蓮は『守護國家論』、『立正安國論』、『無得道論』各一卷を公にして淨

土一門に對して辛辣な批評を加へたことから、これに對して實惠は『摧邪興正集』二卷を著し、源空の立場を辯護し、また、岸了は『辨無得道論』二卷を公刊して大に淨土一家のために氣焰を揚げてゐる。

今、高辨明惠は『摧邪輪』並に『同莊嚴記』に於て法然源空の『選擇本願念佛集』の第三門念佛往生本願篇を評釋して、先づ法然の主張する菩提心について五種の大過を擧げてゐる。

一、菩提心をもつて往生極樂行となさざる過、

二、彌陀本願中菩提心なしといふ過、

三、菩提心をもつて有上小利となす過、

四、雙觀經に菩提心を說かずといひ、並に彌陀一敎止住の時菩提心なしといふ過、

五、菩提心は念佛を抑ふるといふ過、

已下この五項目について兩者の立場を明にしよう。

(イ)高辨の所論としては、諸經論の指示するところに從へば、淨土往生の正因として最初に發菩提心を勸めてゐる。加之、善導の觀經疏に於ても處々に發菩提心を勸めてゐる。よつて、往生淨土の正因について菩提心と稱名とを對比するときは、寧ろ、發菩提心は正業であつて稱名は助業であるべきである、にもかゝはらず、その正業たる菩提心を選捨して往生の行とせずと斷することは佛

教の常識を缺ぐものであると酷評したのである。

源空の所談によると、善導の素懷はもとより勸發菩提にあるのである。だが、最極の劣機を對告衆とする場合は、稱名專念の宗義によつて、且く發菩提心を論ぜないまでである。善導の『玄義分』に諸佛大悲於苦者、心偏愍念常沒衆生等といつてゐるから、この最極の劣機に重點をおいての所論から發菩提心を選捨したものである。

（ロ）高辨によれば、『選擇集』三輩念佛往生の文に彌陀の本願中には大菩提心等の餘行なしといつてゐるが、既に第十九願中に發菩提心修諸功德等とある。また、第十八願文中に、明に菩提心の文がないが、至心信樂といつてゐる。懷感の『群疑論』などの指南によれば、至心信樂とは正に菩提心である。これらによつても明に源空の意見には獨斷があると批評してゐる。

源空に從ふと、大無量壽經の四十八願中第十八願をもつて生因の願とし、第十九願を來迎の願として生因願とは取扱つてゐない。また至心信樂とは下品惡機によく堪ゆる深重の信心を指したものであつて、聖道の菩提心ではない。淨土三經の誓願は苦逼下劣の機に對しては專ら念佛を勸めて菩提心を勸めたものではないと斷じたものである。

（ハ）高辨の菩提心釋は華嚴家の表公の說によつて立てたものである。表公は四發心を出し、第一は緣發心である。卽ち菩提を仰緣して發心してこれを求むる心であつて、未入位前のものである。

第二は解發心である。卽ち一切法悉く是れ菩提なりと解することで、信住位のものである。第三は行發心である。卽ち一切行が自ら菩提に契ふことで、行向位のものである。第四は體發心、また性發心ともいふ。卽ち菩提自體の顯現であつて一切の性を證するものであつて、初地より金剛心に至るまでのものであると釋してゐる。これによつても菩提心の範圍は廣くその價値は無上であるべきに、選擇集の念佛利益篇によれば、菩提心を有上小利となし、一念稱名をもつて無上大利とすることは價値の顚倒であると評難してゐる。

然るに源空によれば、善導の觀經疏によれば讀誦、觀察、禮拜、稱名、讚歎供養の五種行の中稱名を正行とし、餘の四を助行としてゐる。また『往生禮讚』、『觀念法門』等には第十八願名を稱名念佛の願としてゐる。また、發菩提心等の諸行をもつて有上小利の行とするは正く稱念佛の下機に約する法門である。源信の『往生要集』の事理二懺判と同じく、劣機を正所被とする場合は餘行を廢して小利とし、稱名を歎じて大利となすべきは至當であるとの所論である。

(二)高辨の評難によれば、凡そ菩提心は己心の本性であるから自ら發心せらるべきである。若し人あつて彌陀の名號を聞き、大信心を生じ、大歡喜を生ぜば卽ちこれが大菩提心である。また、よく佛號を念じ、不惜身命ならばこれこそ大菩提行である。然るに『選擇集』の特留念佛篇には、雙卷經には菩提心を說かずといふてゐる。四十八願こそ正しく彌陀の菩提心行といふべきであるに、

かゝる妄斷は全く首肯できないことだと評してゐる。

この評難に對する源空の意見によれば、雙卷經に菩提心の行相を說いてゐないといつたのは、所化衆生の菩提行相を說いてゐないといふのであつて、決して彌陀如來の發菩提心を否定したものではない。蓋し無相の大菩提心をば末法濁世の愚夫いかにして發することができやうか、況や、經道滅盡の時に於てをやとの立場にあるやうである。

（ホ）高辨の難破によると、『選擇集』付屬名號篇中に菩提心行は却て念佛を抑ふといつてゐるが、善導の觀經疏文によれば一向專稱彌陀佛名に重點を置いたやうである。一向とは全く菩提心であつて、たとひ專稱佛名しても菩提心を捨てるといふことになれば、稱名行の意義が成立せないことになる筈である。また、念佛三昧といふ名義を往々見かけるが、念は正念であつて正しく菩提心である。佛はもとより菩提であり、三昧また菩提心である。だから念佛三昧の名義は全く一菩提心である。凡そ一切諸經所說の諸行はすべて菩提心所起の行である。この意味に於て、菩提心が念佛を損するとの論理は不合理であると論破してゐる。

この難破に對する源空の意見によれば、菩提心等の餘行が念佛を抑損するといつたのは、稱名一行によつてはなほ往因の不滿を思ひ更に雜行雜心を起すともがらへの警告の意味からである。『金剛寶戒章』によれば證空が往生極樂を願ふものは戒行を持しては雜行となるかとの問に對して、源

空は念佛に於て往因不足の思をなして戒行を受持するなればそれは雜行といふべきだが、通佛敎の威儀として戒行を受持するものは雜行とはならぬと解答してゐる。また、幸西が念佛の行人にして正理を兼ぬれば不純のものとなるかとの問に對して、源空は有智の念佛者が豫め淨土の果報を想察しようとして悟學を兼學することは至當なことであると解答してゐる。これらの事實から考へて菩提心については永く一向に厭捨する意味ではないやうである。だが、淨土敎徒としては、發菩提心とは全く願往生心の外にあるものではないとさへ考へられたものである。事實は願生心は菩提心を緣として生起するものであるが、それ自體は菩提心よりも更に深い意義をもつものとして取扱はれたやうである。

已上は、高辨と法然との菩提心に對する立場の相違を述べたものであるが、この法然の菩提心論が更に明確に親鸞の上にあらはれてゐることをつけ加へて置きたい。

親鸞は、源空の指南によつて、三經七祖を通して、淨土の大菩提心を力强く高調してゐる。以下彼の三經七祖觀を概觀しよう。

先づ三經中『佛說無量壽經』下には、三輩をあげ各無上菩提の心を發すべきことを示し、『觀無量壽經』には、佛の所說をきいた五百侍女は阿耨多羅三藐三菩提心を發して彼國に生ぜんと願じたと說いてゐる。世親の『淨土論』には、世尊我一心等と說き、曇鸞の『往生論註』下には、「王舍城

所説の無量壽經を案ずるに三輩生の中に行に優劣ありと雖も、皆無上菩提の心を發さざるなけん、この無上菩提心は卽ち是れ願作佛心なり、願作佛心は卽ち是れ度衆生心なり、度衆生卽ち衆生を攝取して有佛の國土に生ぜしむるの心なり」といつてゐる。道綽の『安樂集』上には、「若し發心作佛せんと欲すればこの心は廣大にして法界に徧周せり、この心は究竟して等きこと虛空の若し、この心長遠にして未來際を盡す、この心普く備に二乘の障を離る、若し能くひとたびこの心を發せば無始生死の有淪を傾く、乃至今既に淨土に生ぜんと願ずるが故に先づ菩提心を發すべし」といつてゐる。源信の『往生要集』上末二十五丁に於ては緣理の四弘と緣事の四弘とにわけ、緣事の四弘とは一に衆生誓願度の心は卽ち饒益有情戒であり、また恩德の心であり、緣因佛性であり、應身菩提の因である。二に煩惱無邊誓願斷とは攝律儀戒である。これまた斷德の心であり、正因佛性であり、法身菩提の因である。三に法門無盡誓願知とは攝善法戒である。これまた智德の心であり、また了因佛性であり、報身菩提の因である。四に無上菩提誓願證とは佛果菩提を願求するのである。前の三行願を具足するによつて、三身圓滿の菩提を證得し、還て廣く一切衆生を度するのである。

緣理の四弘とは、一切諸法は本來寂靜であつて非有非無非常非斷、不生不滅不垢不淨であつて、一色一香無非中道、生死卽涅槃、煩惱卽菩提である。乃至この故に普く法界の一切衆生に於て大慈悲を起し、四弘誓を起すのであるがこれは順理發心と名づけられ、最上の菩提心であると斷じてゐ

る。

これら經論釋の指示するところに隨つて彼の著『教行信證』信卷本には、「菩提心に就て二種あり、一に竪、二に横なり、又竪について二種あり、一に竪超、二に竪出なり、竪超竪出は權實、顯密、大小の教を明せり、歴却迂廻の菩提心、自力の金剛心、菩薩の大心なり、亦た、横に就て復た二種あり、一に横超二に横出なり、横出とは正雜、定散、他力中の自力の菩提心なり、横超とは斯れ乃ち願力回向の信樂、これを願作佛心と曰ふ、願作佛心は卽ち是れ横の大菩提心なり、是れを横超の金剛心と名くるなり、横竪の菩提心其言一にして其心異なりと雖も入眞を正要とす」と示し、また彼の『正像末和讃』には「自力聖道の菩提心、こゝろもことばもおよばれず、常沒流轉の凡愚はいかでか發起せしむべき」ととき、また、「淨土の大菩提心は願作佛心をすゝめしむ、すなはち願作佛心を度衆生心となづけたり」といひ、また彼の『高僧和讃』には「願作佛の心はこれ、度衆生のこゝろなり、度衆生の心はこれ利他眞實の信心なり、信心すなはち一心なり、一心すなはち金剛心、金剛心は菩提心、この心すなはち他力なり」といつてゐる。

これらの論證によれば親鸞の意見は、他力の信心をもつて大菩提心なりと斷じたものであるが、全く曇鸞の意見を繼承したものであつて、如來回向の他力の大信心は願作佛心の自利と、度衆生心の利他との兩德を圓具するから大菩提心と名けらるべきであると論成したものである。

已上源空、親鸞によつて、淨土門に於ける菩提心を一瞥したのであるが、このことから聖淨二門の判然たる區別の基本をなすものは、正に菩提心釋にあることを知ることができる。佛道を求むる心であり、覺行を圓具せんとする勇猛精進の志である菩提心は、何人によつても發起されねばならぬものである。だが菩提心を發起する機相については、聖淨二門によつてその立場を異にするところから、その間かなりのひらきがあるやうである。かくて、已上の聖淨二門に於ける菩提心の各種の風格に接することによつて、こゝに新たなる感激を覺える資料としたい。

親鸞の著『淨土文類聚鈔』卷末に

常沒凡夫人、緣願力回向、聞眞實功德、獲無上信心、則得大慶喜、獲不退轉地、不令斷煩惱、速證大涅槃矣。

彼の菩提心論の要諦はこの告白によつて盡きてゐる。